学習院サポーターズ倶楽部
会員Letter
vol.12
April 2020

『学問が目指すのは真善美である』を教旨に“学習院らしさ”を失わず、世を平和に導く人が育つ大学として

学習院大学長 Interview

荒川　一郎
（学習院大学長）

学習院のさらなる飛躍に向けて

この春学習院大学長に就任しました。学長として、最初に「どのような人材を育て、どのように社会に貢献していくか」を明確に示す必要があると考えました。学習院の源は官立の教育機関としての華族学校ですが、大学は昭和24(1949)年に新制大学として設立され新しい出発を果たしました。そこに建学の精神を示したのは、初代大学長を務めた安倍能成です。安倍先生は学習院を立ち上げた最大の功労者であり、戦前・戦後に一貫した平和主義のリベラリストとして多くの平和運動に参画されました。私たち教職員は今一度、安倍先生の理念や行動に立ち返り、学問する者の立場から世の平和の実現に貢献し、世を平和に導く人が育つ大学として『学問が目指すのは真善美である』を教旨とする所存です。“真善美”とは、“真理”、“事の善し悪し”、そして“環境や社会に美しさを保つこと”を指します。真善美が平和につながると信じています。

社会を導く学生が巣立つ大学であるために

もう一つ重要なものとして、10年から20年にわたる中長期計画の策定があります。すでに外国語教育の充実を図るべく、教員補充とカリキュラムの改善に着手。また、基礎的な教養科目の見直しも始めました。自身の専攻と他の学問分野の関わりを意識できる科目を整え、“真善美”につながっていく、学生にとって本当に必要な教養を身につけてほしいと考えています。

10年、20年先を考えるとき、ますます進歩するであろう情報技術へ対応できる、いやそれを率いていく学生が育つ仕組みを作らなければなりません。また持続可能な発展の仕組みを社会に構築することは避けて通れない課題です。それを導く学生が巣立っていく大学を作ることは中長期計画の大きな柱です。

技術の急速な進化と社会の在り方に対する考え方の変化により、将来を予測するのは困難です。変化する時代に対応しながらも、できる限り“学習院らしさ”を失わずに世を導く舵を取っていきたいと思います。中長期計画は、必ずや学生にすばらしい大学生活をもたらすと信じています。実現にあたっては長期にわたる経済的な裏付けが不可欠です。皆様の深いご理解と継続的なご支援を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

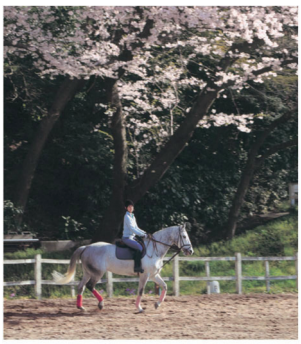
Profile　荒川　一郎（あらかわ　いちろう）

学習院大学長
昭和51(1976)年東京大学工学部物理工学科卒業。昭和59(1984)年学習院大学理学部講師。平成6(1994)年同学部教授、現在に至る。専攻は表面物理学、真空科学。令和2(2020)年4月学習院大学長に就任。趣味は山登り。

学習院の名情景

第6回 乃木号碑　出陣の碑

キャンパスに遺る数々の馴染み深い場所をご紹介していくこのシリーズ。第6回は「乃木号碑」と「出陣の碑」です。日露戦争と第二次大戦のエピソードにつながる両碑には、学習院の歴史に名を刻む二人の院長が深く関係しています。



馬場の北側から馬術部の練習を見守り続ける乃木号碑
（左 学習院大学史料館提供）

キャンパスの南端、馬術部の馬場を見下ろす斜面の一角に「乃木号碑」が建っています。乃木号は、学習院第10代院長を務めた乃木希典（のぎまれすけ）（嘉永2《1849》～大正元《1912》年）が、陸軍大将として日露戦争で旅順要塞を攻略後、敵将ステッセルから譲り受けた名馬「寿（す）号」を父とする馬です。鳥取県の牧場で生まれた後、寿号の多くの仔の中で最も父親に似た一頭として乃木に寄付されました。

乃木がステッセルから寿号を贈られたのは、有名な「水師営の会見」でのこと。旅順攻略の4日後に行われたこの会見で乃木は、通常は許されない敵将の帯剣を認め、従軍記者には記録写真を1枚しか撮らせないなどロシア軍人の名誉を重んじました。さらに互いの健闘を称え、酒まで酌み交わしたといいます。闘いの後は敵味方なく認め合う、ラグビーのノーサイドのような精神が共有されていたのかも知れません。

寿号の血を引く乃木号は、乃木の没後も長く学習院の馬術教育に貢献しました。学生から「乃木さん」と呼ばれて可愛がられつつ、昭和12《1937》年に27歳の天寿を全う。亡くなるや直ぐに卒業生有志の手で碑が建立されました。

乃木号（『学習院馬術百二十年史』より）

北1号館の北には、第二次大戦の記憶を刻む「出陣の碑」が静かに佇んでいます。戦争末期、昭和20《1945》年初春に建てられたもので、碑文は「目白ケ丘の櫻と咲かむ」。昭和18年から始まった学徒出陣に際し、翌19年学習院高等科2年の文科学生はこの言葉を下の句として「御国守り南のきはに 身はすてゝ 目白ケ丘の櫻と咲かむ」「春されば めぐし乙女ら かざすてふ 目白ケ丘の櫻と咲かむ」など、各々の決意を和歌に託し戦地に赴きました。

碑に揮毫したのは、第17代院長山梨勝之進（やまなしかつのしん）（明治10《1877》～昭和42《1967》年）です。山梨は院長就任前の海軍時代は良識派として軍縮に奔走。知性と教養、人徳を兼ね備えた傑人として、海軍大将を務めました。昭和14《1939》年からの院長在任期間は、戦争が学校教育に暗い影を落としていった時代。その中でも山梨は、学生の本分が勉学にあることを説き、戦意高揚を煽ることもしませんでした。教え子たちを戦地に送り出さざるを得なくなったとき、山梨はどのような気持ちで出陣の碑の句をしたためたのでしょうか。

出陣の碑は短歌の下の句のみが刻まれた全国でも珍しい歌碑（『戦後学習院の出発』より）

取材協力:学習院大学史料館 学芸員 冨田ゆり